

田谷 鋭百首

宮里信輝 選



田谷 鋭

生活に面伏すごとく日々経つセルジュリアールの踊りも過ぎむ

〔乳鏡〕

遠き國の雪積む貨車が目前を過ぎ瞳吸はるるわれと少年

罪犯さぬ頃は小麦粉が降りしといふ中國のふるき物語「雪」

ダミアのうた聞きつつ心あてどなきわが傍らの夜の繪襖

なにかなし野は明るくて高貴なる花桐ひと木憂ひ隔かしむ

私かなるよろこび事ぞ空箱を解體し釘のたまりゆくとき

童が吹きしこまかきシャボン玉の群しまし確かに風にのりゆく

自轉車に觸れてあやふくよぎりたる今年の蜻蛉油なす翅

祕密めき妻いふあはれ内職の手袋に血のしみつけしこと

ブルマースにて毬つく少女跳びまたぐとき美しき兩股の反り

見るたびに心のゆらく紫の藤にして今朝塀に影せり

寒ゆるぶ日の昏方を停りるる貨車に静まりて黒き車輪あり

じりじりとセメントの袋擔ふさま重心の移るさま見えてをり

よいとまけの綱ひく聲す餘剰の思想もたざる清く充ちしこゑ

爆心地を究むと引きし幾十の線の交叉し圖表のうへに

昏れ方の電車より見き橋脚にうちあたり海へ歸りゆく水

昏れどきの人らかへりみぬ店先に洗濯機はゆたかなる水を揉む

漂ひて來し蝶ひとつ塀際の風のながれにしまし耐へるる

薪のこぶにくひ入りし鉦を提げしまま何を茫然とわが佇ちてゐし

肌照らひ孤りあそべる馬見えて心吸ふまで海は蒼しも

朝々の車窓をつねによぎり去る石の壁ありて冬の昏き壁

虹いろの孔雀の羽根が鐵板の壁にふれつつひらき始めぬ

道なかに衄血せしことの寂しくて歩みくればめぐる夜の矢車

壯麗に組まれし鐵梁の高處にて戀ほしただ一人作業する人

鶴鶴の金嵌つ如きこゑのして林泉にひとしきり繁し霞は

搖ぐかに薔薇にほへり雨の夜の冷えし疊に身を起すとき

茶の粉の青微かにて不可思議の耀ひに充つ茶筒のうちは

わが面をひたと見凝めつつ椰子が語彙さがしさがし告げむとぞする

『定本波濤遠望集』

さむき雨降ればおもほゆ家出でてさまよひし夜の神田人形町

空瓶に子が詰めたるは何の実かきつしりと青し夜の灯のもと

構内の灯と月光とけぢめなく及べる庭の厚き苜蓿

瀝青の剝落のごと紫陽花の花こぼれをり雨間の土に

朝焼のすぎて清浄の空の藍励みの果に展く世界とも

よそほひを気にしつづ夜の新宿に降りし処女によるこびあれよ

びしよ濡れの黒き合羽とゴム引の帽置かれるて激情のごと

孤独なるさまにフィールドに射さりたる槍をひとときテレビは見しむ

臥してゐし我が唐突に立上り歪みつつ方形を取戻す部屋

機械のみの寥しき室に入るとして人はのぼりゆく鉄の梯子を

「原爆の惨状に似る」と阿蘇噴火を比喩し言へりああ日本人ゆゑ

カミキリもクワガタも棲むかの山へ行かんと幼く誘ひある声

新割りつつ成りたる歌を地に書く睦月に近くまだ荒れぬ土

父ははの面知らぬ嘆きもつことも寶石の如き生の恵みか

壁とちがふうるほへる闇地下鉄はいつしかに夜の地上に出でて

青草にこもり燃えゐるほむら一つ夢の續きの如しあしたを

視野にあるテレヴィの畫面俳優は慣れし藝に時間を埋めつつうごく

『水晶の座』

聚りて破片は青し整々と箱積む瓶工場の庭の一隅

犯しゆく罪も輝かん緑金の布を黒髪に女は巻きて

さらにわれ生きねばならず夜の灯照る泥濘に無数に人行きし跡

暗黒を疾る電車の玻璃に見え優しよ人がつけし息のあと

裝飾をしりぞけしビル壁面の美し資本の悪おもふまで

癒えそむる肉體のうちに植物の蔓のぼしゆく如きころよ

親しげに干ししシャツなども飄りつつ鏡の中の假構の世界

橙紅にくるふ炎の澄める見ゆ過ぎて見返る闇の風かざな中

大年の眞間の街裏しづけきに硝子戸きよき仕立店あり

ウインドの中ゆく我は現實よりやや暗く風に服皺みたり

思想もつゆゑに漂ふ人間の吾ありて見をり雨のあらくさ

無秩序に灯は漆黒の車窓過ぎ思ほえぬ高みに輝くもある

もの書くと苦しみし日の夕べにて蜆を洗ふ厨への音

こひねがひ潰えたる夜を黙しめて子の萬華鏡のさまさま覗く

遠く見る白波の秀のあるものは岩躍り越ゆ群ぐんを離れて

海の面の騒立つ青を見つつ來ていまおそろしく和ぐ潮に入る

天心にゆくほど青き空の下われ一人立つ潮鳴り聞きて

屋根を抜けしほむらの中に反りしるく黒き瓦の次つきと落つ

仰臥しに草に憩へる男みて黄の鐵帽を樹幹に吊す

シャツの内動く肉もつ若者はわが前を去る彫像見終へて

田蛙の風にのりくる聲聞くに驚のこゑはやや高くより

おのおのも春日に影しカタクリの花はも寂し一莖一花

白き鯉の過ぎゆく膚にかたはらの鯉の緋色のたまゆら映えつ

ゆくりなくバスとどまりし山麓夏柑ひと木黄の落ち腐つくた

ただ赭き山いただきの埴原のうちつけにしも虚空に接す

かけりゆく鶉うの鳥二つしばししてあとが先立つうしほの空に

子をもちて二十三年わが得たる慰藉限りなし與ふるは無く

うつし身の息衰ふる我かとも身丈みたけの菊の照るにま對ふ

磯岩のか黒なるうへ潮泡しほはいま抽象のかたち騒ぐ

肩冷ゆる朝けと思ひめざめをりやはきしとねもわが妻の愛

地のいぶき離れて海に相寄れる雲をさびしみ晝の空ゆく

寂しきもわが餌食なれ雨の日の植物園の木暗ゆきつつこぐれ

尺さしもちて藤房の丈はかりをりたまたまに來し作業の人ら

まほろしの龍巻をわがおもふまで海はしづけし照る月の下

おのづから鳥葬の語を思ふまで身は一人なり山は静けく

四十年へだてて日本經濟の底つくを見る眇たる一身

狂ふなき心搏動をうつし身に傳へて逝きしわがたらちねや

野の風はここに及ばずわが頭上しだれ櫻は淡紅の雲なす

世のこのなべて虚妄と思ふまで老木のさくら灯に明り咲く

つたなかるはた貧しかる生のなか君ありてわがいのち照らさる

かの喬き樺をわたり來し風かのほりの鯉の彩りを揉む

野うさぎの罨の話をあかずするわが酔ひどれの鳶職親し

年ながく我が家に病者一人なし謝しつつ仰ぐ寒夜白雲

一傾斜群立つ杉のおのおのを彫れる如くに朝日は照らす

心を病む幼子いかに育つらむ兄老いし家さまさま暗く

藥もて身をなだめたる今朝のこと茫茫と思ふ青葉の下に

「田谷銳百首」選まことにたのしい仕事であった。何回もあちこちで取り上げられた著名な歌だけでも、たちどころに百首は越えてしまった。その分見覚えのある歌が多くなったかもしれない。

田谷銳の歌は、いちど読めばすぐ頭のなかに「刻印」されてしまう。それは一首一首無駄がなく、彫りがふかくて直接的のちにひびき、心に沁み入るからである。静と動、激情と沈静、炎と水、強靱と柔軟、親しさと峻厳等の相反世界が同

生に觸れわが思ひたり植物は衰ふるとき甘き實を持つ

永劫のうしほ億劫の天つ日かうつし身小さく渚に立てば

朝食の人らを待ちてビルの中ひそげき店を人は清むる

剪りしときその花はつかつほみしと白き牡丹を手にして妻は

病みがちに生きて桜のはな食ふる現もあはれ野の鳥に似て

ごろつきの端役も演じ生きてゆくテレウイの甥に現前に会はず

ただ厚く鉛の壁のとり囲む部屋におよそのわが生は過ぎむ

ひと時を集ひし人らなべて去り夕づく山に滝はひびかふ

入りてきて健やけき蠅ひとつ飛ぶ暑の窓ひらきわが励む部屋

歌の表記・ふりがなは歌集に準拠しています。

居する単純ではない色彩あざやかな「美」の世界、見事というほかはない。

『乳鏡』等の初期の定型に収まりきらない独特なリズムは、句割れ句跨り等を用いた現代の多様なリズムの先取りでもあった。歌集を重ねることに歌は個から世界を広げ、虚実や、写実、象徴を越えてゆく。『ミモザの季』以降の膨大な作品がそのまま、その後の歌集が切に待望される。

宮里信輝(みやさと・のぶてる)「コスモス」選者・編集委員)